

## 『申報』における楽善堂の広告宣伝活動（1880～1893年）

陳祖恩

楽善堂は岸田吟香が上海に設立した薬品販売を中心とした店舗であり、書籍の印刷販売と医療診察を兼ねるものだった<sup>1</sup>。彼は漢学の基礎を学び、新聞記者の仕事をした経験もあり、かつその人柄に魅力があったため、上海で『申報』を中心に形成された文化人の輪にすぐさま加わることができた。それによって楽善堂と『申報』との関係は一般の顧客と広告主の関係とは異なったものとなり、『申報』は楽善堂が自由に広告宣伝を行う場所を提供したのだった。楽善堂の上海での広告宣伝について研究することは、日本広告史前期の巨人といえる岸田吟香の上海における広告活動のやり方を見出せるだけでなく、その活動の舞台背景を提供した上海の人文と社会の環境をも一層深く理解することができると考えられる。

### 一 岸田吟香と上海楽善堂の設立

岸田吟香は、1833年岡山県に生まれ、名は辰之治といい、元服の際に太郎と改め、後に銀次と改名する。幼い頃に寺子屋の教育を受け、12歳で漢学の勉強を始める。17歳で「大魚不游小池」〔大魚小池に遊ばず〕という志をもって、江戸に到り漢学を学ぶ。後に、陸游の詩「吟到梅花句亦香」を好んだことから、号を吟香とした。1864年、眼病を患ったことから、アメリカの宣教師ヘボンが横浜で開設した「医館」を訪れて治療を受け、西洋の液体目薬の効力を体験する。同年、ヘボンを補佐して『和英語林集成』を編纂する。1866年9月、ヘボン夫妻とともに上海に赴き、美華書館で『和英語林集成』を印刷し、1867年5月に帰国する。『和英語林集成』の編纂補助及び印刷に対する報酬として、ヘボンは彼に目薬調合の秘方を授

ける<sup>2</sup>。ヘボンの承諾を得て、岸田は目薬「精錡水」の調剤と販売を開始する。1868年1月、彼は単身上海に到り、小東門外の「瑞興号」と洋涇橋の「万祥号」と契約して、2店を目薬「精錡水」を販売する代理店とし、店頭には「東洋岸田吟香先生監制、眼薬水精錡水寄売」〔東洋は日本のこと〕の金文字の看板を掲げさせる。その後、4月に帰国する。

新聞広告は近代における新聞の誕生に伴って登場した。日本の近代における新聞の創始者の1人として、岸田は日本で最初の民間新聞である『海外新聞』の創刊に関わり、1868年には『横浜新報・もしほ草』に参加、1873年には『東京日日新聞』の記者、主筆となる。彼は新聞広告が一般大衆に及ぼす社会的影響力を熟知していたことから、1871年8月17日、創刊間もない『横浜毎日新聞』に「精錡水」の宣伝文を載せた。それには「この目薬はアメリカの名医ヘボン先生より伝法の良剤にて、世にありふれたる売薬の類にあらず。機能はのうがきにくわし。大瓶 代金壹朱、小ビン 同四百五十文。販売所 蒸気松屋 岸田銀次」とある。明治維新後の日本では、西洋文明を崇拝する社会の気風が高まりつつあり、「精錡水」がアメリカの名医が開発した西洋薬であることを強調したことは、当時の民衆に対して非常に大きな吸引力を持った。

1874年4月12日、「精錡水」の広告が『東京日日新聞』上に初めて掲載された。そこには「眼病即癒、精錡水」と書かれている。また、別の『東京日日新聞』には「横浜岸田氏製、精錡水売弘所」とある<sup>3</sup>。

1875年9月、岸田は東京銀座2丁目1番地に「精錡水調合所」（楽善堂薬舗の前身）を設け、

『東京日日新聞』の仕事の関係を利用して、自分が編集する新聞記事の中に巧みに「精錡水」の広告を盛り込んだ。それには「記者岸田吟香 精錡水の宣伝 説明書無料進呈」とある。

彼が「精錡水」を宣伝した同じ時期、守田治兵衛が製造した胃腸薬「宝丹」も頻繁に新聞広告上に登場した。当時の日本の新聞広告の中で、薬品広告は目に見えて増加し、数量の上で急速に書籍の広告に近づいた。薬品広告がよく「神薬」などという表現を用いたために、誇大広告の要素は少なくなかった。例えば、「宝丹」は「起死回生」の効能があると称した。また、日本の新聞上のこうした薬品広告や、新聞に関わる者がその関係を利用して広告宣伝をする方法は、多くの読者の批判を受けることになった。1878年3月24日から、福沢諭吉は『民間雑誌』の中で「売薬論」と題する社論を連載し、新聞が「売薬の良否を問わず」にその広告を載せているのは「売薬師の提灯持に異ならず」と指摘している<sup>4</sup>。その後、日本の新聞界は広告の浄化措置を採った。新聞関係者と広告主との関係を厳格にし、誇大宣伝の要素を含む薬品広告が登場するのを阻んだため、新聞上の薬品広告は著しく減少した。このような社会背景は、岸田が上海に楽善堂を作ることを促し、かつその薬品の広告を『申報』上に大量に載せる原因の1つとなった。

1878年、岸田は再び上海を視察した。当時の上海は、西洋文明の影響を急速に受けつつあったとはいうものの、新聞事業の発展は、特に広告の新聞紙上での運用において、明治維新後に急速に勃興した日本にまだ追いついていなかった。岸田の視察によると、上海の当時の広告の大部分はまだ古い時代の方法を踏襲していて、大小の白紙の上に書き、人の注目をひく場所に張り出すというものであった。上海最大の新聞である『申報』は「既に3、4千部を発行しているとはいうものの、新聞広告を十分に運用するまでには至っていない<sup>5</sup>」としている。

同時に、中国市場が広大であることや、各国の商人が競い合う場所としての上海の市場の価値の高さも、岸田が上海で事業を発展させようとする情熱をさらにかきたてた。1878年に上海を視察し



図1：『郵便報知新聞』1880年1月21日  
(出典は『日本新聞広告史・電通創立四十周年紀年』)

た際、彼はイギリス租界河南路の旧巡捕〔外国租界の警察署〕の隣に楽善堂上海支店の場所を定めた。1880年1月21日、岸田は『郵便報知新聞』に「私は今日出帆の郵船東京丸に乗込み支那へ精錡水を売り弘めに参ります」とする挿絵付きの広告を載せ、中国大陸で事業を発展させることを正式に宣言したのだった<sup>6</sup>。〔図1参照〕そして2月、彼は上海に赴き、3月13日、上海楽善堂は正式に開店した<sup>7</sup>。

## 二 上海の文人と交わりを結ぶ ——楽善堂広告の策略

1872年4月30日、上海で『申報』が創刊されたが、その経営者はイギリス商人メイジャーだった。それ以前には、中国語の『上海新報』（1861年創刊）はあったものの、完全に西洋のやり方で新聞を作ったため、効果は決して芳しくなく、発行量はわずかに400部以内にとどまっていた。『申報』の創刊後、上海の状況を熟知している中国人の主筆を雇って編集を担当させた。彼らは言論とニュースを重視し、広告の掲載内容を拡大するとともに、中国の文人の詩、短文、時評等を掲載料なしで発表させたことから、多くの文人をひ

きつけた。同時に、それは書籍出版業務を兼ね、創刊の年の10月には、『王洪緒先生外科証治全集』を出版した<sup>8</sup>。10数年の努力を経て1880年代中期までに、『申報』は完全に中国人が主宰する上海における新聞出版事業の中心となった。

『申報』は主筆を中心として、「吟壇」という専門欄を作り、上海の文人に活動の場を提供した。文人たちは『申報』に詩を発表し、互いに和して、情感を述べ合うことで、友人としての交わりを深めた。「吟壇」上で活躍した上海の文人は100余名にのぼったが、この中で、高悞軒（太痴生）、何桂笙（高昌寒食生）、王蹈（弢園老民、天南游叟）、王恩溥（甬東小楼主人）、袁祖志（倉山旧主）、黄協埙、錢昕伯（霧里看花客）等が著名である。高悞軒、何桂笙、黄協埙、錢昕伯等の人々は前後して『申報』の主筆になった。

岸田が上海に着いた時は、まさに『申報』の発展期であり、新聞人兼商人としての岸田は、上海第一の大新聞である『申報』の社会的影響力を深く知り、その「吟壇」に強く引きつけられていった。同時に、彼は『申報』の記者と仕事の関係上でも縁があった。1874年、日本は琉球の漁民が被害を受けたことを理由に台湾に侵攻したが、事件発生後、彼は『東京日日新聞』の記者の身分で台湾に赴き、多くの記事を日本に送った。『申報』の記者も同時期に台湾に渡り、7月22日から『申報』で関連する記事を発表した。「読者は先を争って読み、毎日の売り上げ部数は以前よりも600部増加した。<sup>9]</sup>

楽善堂は河南路の旧巡捕の隣に建てられたが、申報社からそこは非常に近かった。岸田は上海に着くと、楽善堂の2階に書齋を設けた<sup>10</sup>。そして中国人の3字の姓名をまねて、「岸吟香」と改め、書齋に名前を付けて「借樓」とし、かつ自らを「海上売薬翁」と名乗って、上海の文人の輪にすぐさま加わった。上海の文人は彼の日本における経歴と魅力ある人柄に好感を抱いて、友人として遇した。『申報』の主筆黄協埙は次のように述べた。「我友岸田吟香先生は、日本の名士である。性格は素朴で忍耐強く、軽薄なところがなく、人と交際する際には、教養にあふれておっとりして、未だかつて言葉をあらげて慌てる風がない」「私

が先生と知り合って既に数年経つが、休日に先生の書齋を訪ねて雑談をするたびに、先生の図書の豊富さが目に入る。まさに充棟汗毛〔蔵書が積み重なっている〕のごとくである。海外の珍しい本が沢山あって、中国では見ることがない。だからその本をひもとく人は誰でも、琅嬛の福地〔奇書を蔵する仙境〕に入ったような気持ちになり、目に触れるものすべてが宝物のように感じられる。先生は、口ずさんだこと、心で考えたことがくいちがうことはなく、時に私たちとこれを論じ、懸命に励み、老いを知らない。先生の学問は非常にすばらしい。先生は経生〔本格的な学者〕を名乗ることを欲せず、ふだんは医学をすることでその能力を隠している。<sup>11]</sup>

岸田は、『申報』の「吟壇」の活動に参加してからのちに、「玉蘭吟社」を作ることを提案した。「去年の百花の誕生日〔陰暦2月12日または15日を百花の誕生日と呼んで花神を祭った〕は、樓の向かい側に木蓮が満開だったので、先生は大いに喜んで、このような機会を借りて心のたけを心ゆくまで吟じましょう、と言って、そこで上海の諸名流を集めた。」「弢園老民に主宰してもらい、社名も老民に付けてもらおうとした。老民は、それでは玉蘭吟社と名付けよう、と言った。その時會したのは10余人だったが、みな先生の長寿のために詩を賦した。それから月に1、2度は挙行し、詩は冬のたけのこのごとくにつくられた。<sup>12]</sup>「弢園老民」はすなわち中国の著名な思想家王蹈（1828～1897年）のことである。彼はかつて欧州を遊歴、1874年に香港で『循環日報』を作って変法自強を宣伝し、1884年に上海に帰り、格致書院を主宰して多くの文章を発表した。「玉蘭吟社」を結成して以来、岸田と上海の文人との交流は一層深まった。「およそかの国の人士と交わるのに、詩酒のつきあいを頻繁にして、概ね無駄に過ぎる日はなかった。<sup>13]</sup>

岸田は俞樾とも深い交流があった。俞樾（1821～1907年）は、字を蔭甫、号を曲園といった。翰林院の編修、河南の学政を歴任し、1862年からは蘇州、上海で学問を教えた。1868年からは、杭州詒經精舍を主宰して学問を教え、『在春堂全書』を著して、その名は日本の学者にとどろいた。

1882年(明治15年)秋、彼は兪樾に「東瀛詩選」の編纂を委託したが、これに対して兪樾は5ヶ月を費やして、翌年春には44巻を編纂し、5千首余りを収録して、日本から出版した。このことは日中文化交流史上の一大事となった。彼が50歳で次男をもうけた際、兪樾に名付けてくれるよう頼むと、兪樾は喜んで応じた。「吟香居士は年五十を越えて一子を得、余に命名を請うた。余は五十のことを艾と言うので、艾生と名付けた。そして詩を贈った。

半百にしてはじめて雛鳳の鳴くを聞く、この児台艾をもって名とす。

二十余年の後に看るを請う、争って東瀛に回いて艾生を訪れん。<sup>14)</sup>

上海の文人と深く交わり、特に『申報』の主筆何桂笙、黄協埙等と交わることによって、上海における楽善堂の広告活動は水を得た魚のようであった。『申報』は楽善堂の薬品、書籍、文具等の広告を大量に載せた。その数量の多さは空前のもので、1880年から1893年までの間に、薬品広告だけでも100種類以上(付録1参照)になり、書籍の広告は200種類以上(付録2参照)にのぼった。『申報』の主筆は自ら筆をとって、岸田と楽善堂を紹介する文章を發表し、その薬品宣伝の小冊子に序を書くことさえあった。

もしも『申報』の「吟壇」が上海の文人の社交場であったとするならば、楽善堂が上海に登場してからは、『申報』はその広告の社交場となったといえるであろう。これも岸田の上海における市場開拓をねらった広告の戦略であると見ることができる。

### 三 楽善堂の『申報』における広告運用の手段

上述のように多くの広告が『申報』に掲載されたことから、岸田吟香と楽善堂の広告宣伝に対する能力、さらには上海の市場に競って参入しようとする決心を見て取ることができる。楽善堂の上海における広告の策略と運用の手段は、多様なものであり、日本の宣伝のやり方を借用するほか、上海の状況に応じて新しく創作するなどした。およそこれらの方法は、広告事業が始まって間もな

い上海において「東洋」からもたらされた目新しいものとみなされた。

### 1. 「西洋」的な上海で、「東洋仙薬」のブランドを打ち出す

楽善堂の主力商品である目薬「精錡水」は、日本の広告においてアメリカの名医の秘方によって調合された「西洋薬」であるとうたったが、上海においては、岸田はヘボンのことと「西洋」のことは持ち出さずに、「東洋仙薬」の看板を掲げた。「日本は扶桑の東にあり、古く蓬萊と称しました。仙山靈水が多く、奇樹薬草を産します。故に医者には名医が沢山あります。本堂は日本東京に開設して年月を経ており、各種良薬の製造は先祖伝来の秘方に依るものです。目薬精錡水の一項目は、最も意を用いて調合したもので、その効能は尋常ではありません。これは名を四方に馳せ、およそ華人の日本に到る者で買って帰らぬ者はおらず、宝のごとくにみなされています。今特に上海英租界河南路の旧巡捕の向かい、西側東向きに支店を設けまして、入り口を広くとって、購買に便ならしめております。<sup>15)</sup>岸田のこの広告のやり方は他人のものを盗んだのではなく、「西洋」的な上海に的確に対応し、「東洋」なる珍しい看板を出して、中国人の記憶の中にある「蓬萊仙国」の先祖伝来の良薬に対する人々の関心を引き起こしたのだった。楽善堂のその他の薬品広告も、すべて「東洋仙薬」の類のうたい文句がついて登場した。例えば、「麦液潤肺」の広告では「東瀛仙伝、痰や咳を抑える聖薬。<sup>16)</sup>と称している。〔図2参照〕



図2：『申報』1892年8月16日

## 2. 症状に応じて薬を売り、薬で時世の弊害を救う

開港以後の上海は、いかがわしい風潮が日増しに盛んになった。1880年代初期から、日本の妓女が中国人はお茶を好むという特徴を利用して、四馬路（今の福州路）や虹口等の地で東洋茶楼を開設し、色事の場所とした。『申報』の主筆黄協垣（黄式権）は、『淞南夢影録』の中で次のように書いている。「かつて三盛楼という店だけが、遠く白大橋〔二白渡橋のことか〕の北にあったので、色事を好む少年がたまに行くだけであった。近いところと言えば英・仏二租界の場合、至る所にあった。蓬台仙人〔日本の美女〕は、俗世間に降り立ち、豊かな肉体ながら腰が細く、開放的で自由自在である。そして繊細な衣を身に纏い、仙人の袂は風に翻って、また独特の趣がある。費用洋銀一、二角で、苦茶をわかしたり、哀琴を演奏したり、酒の遊びをしたりして、出来ないことは何もない。<sup>17)</sup> 黄協垣と深く付き合い、また有名な風俗街である四馬路のすぐそばで暮らしていたのだから、岸田が上海の「いかがわしい」風気に対して不案内であったはずはなかった。

一方、上海の特殊な地理、つまり土地が狭く人口は密なために、夏は蒸し暑さに悩まされた。この他に、飲み水が不潔であったり環境が悪かったりして、コレラなどの病気が流行し、流行病にかかる患者は特に多かった<sup>18)</sup>。上海の風土、人情を深く理解した岸田は、そのために『申報』に「花柳病」や「コレラ」の治療薬の広告宣伝を大量に載せた。付録1からもわかるように、楽善堂の薬品広告の中で、健康栄養薬を除いて、流行病を治療する薬品が非常に大きな比率を占めている。

岸田はさらに、楽善堂の薬品を紹介する『痧症要論』、『花柳弁症要論』等の小冊子を著すと、『申報』の主筆何桂笙はその序を書いて、『申報』に載せた。何は序文の中で次のように述べている。「東瀛の岸吟香先生は長年中国に住み、その風土や人情を熟知しているのだから、上海で薬を売って、効果がないわけではない。最近薬を売るよりも処方伝える方がいいということで、『痧症要論』と『花柳弁症要論』の二冊を著したが、コレラや毒性の病気を治療するために書いた処方方は皆絶大な効果があり、衆生を救済する上での功績は小さ

くない<sup>19)</sup>

『申報』はさらに、楽善堂が「痧症要論」を無料で読者に贈呈するという広告を載せた。その広告には次のように書いてある。「病を治すにはまず症状を知る必要があり、症状を知ることは、その陰陽を知るにかぎります。陰陽がはっきりしなければ、薬の寒熱温涼の効果は間違って使われることとなります。それでどうして病魔を追い払うことができますでしょうか。コレラという病気は、突然発症して、明日をも知れぬ状態となりますが、慌てるととりわけ適切に処置できず、陰陽を誤れば、ついには助からない状態になってしまいます。それはまことに痛ましいことでもあります。およそコレラは天候の不順や、地理的な条件が良くないことによって発症します。その罹患の原因を述べますと、〔気候の〕寒暖や〔漢方で言うところの〕虚実が定まらず、また生ものや冷たいものを多く摂取したり、酒や色をほしのままにしたりすることによるもので、体内ではまず胃腸が冒され外側では蒸し暑さや汚れた気を感じて、肺を害し、秋になって涼しくなると、急に精気を失って、経絡が滞り、〔身体の〕上下に隔たりができ、ついには病を引き起こすこととなります。世間でいう所謂陰病、陽病、交腸病、烏病、口痧、吊脚痧、麻痧、子午痧、羊毛痧等は、症状の現れ方が異なるのですから、はっきり診断がつかなければ、どうして薬を用いることができますでしょうか。今本堂は『痧症要論』を数千部作り、各位に謹んでお送りし、それを広く行き渡らせ、家々に一冊置いていただきたいと願っております。そして、コレラにかかった際には、病状をこの本で確かめた上で、症状に応じて薬を用いれば、ほぼ誤ることはないでしょう。<sup>20)</sup> 『痧症要論』は「びた一文とらない」と、無料で送呈することを明記していたが、その実、楽善堂がその小冊子を宣伝した際に、コレラの良薬である靈通万応丹、西洋万靈薬水、東方公一粒金、広濟至宝丹、救急時疫靈丹、救急痧気丸、泰西痧気神効薬水、秘方紫雪丹、宝丹などを特に読者にすすめて、家庭の常備薬として買い求めるように促した。これはなんと巧妙なる広告の策略ではないか。

この他にも、楽善堂はさらに『申報』の広告に

において「痧症要論」ですすめている薬について繰り返し紹介したので、これらの薬に対する読者の印象は深まった。『申報』に掲載された広告の中で、説明が比較的詳しいものを、2, 3拾うと、次のようなものだった。

○急救時疫靈丹：「春分以降は、〔陰陽五行で言うところの〕火が盛んになり、天候もようやく温かくなります。芒種〔二十四節気の1つで6月6日頃〕以降は、土が盛んになり、土地もようやく潤います。」「人は気の交わる中にあるので、その汚れた気を受けて、口、鼻、毛穴から取り込んでしまうと、気が滞り、伝染病、暑気あたり、コレラなどの病気を引き起こします。」「この練り薬は不寒不熱で、汚れを退け毒を取り除くことを主としており、副作用はまったくなく、すなわちコレラや、すぐには寒熱の診断が困難なものは、この練り薬を服用していただければ、この上ない効果が期待できると、皆様に自信を持って申し上げます。家の中でも旅行の際もいつも携帯することで、自らの病気を防ぎ、また人を救うこともできて、まさに救世の良薬であります。」<sup>21)</sup>

○秘方紫雪丹：「もっぱら暑気あたりやコレラ、腹痛や吐き下し、伝染病や熱性風土病、流行病や寄生虫病、子供のひきつけ、及び汚れた火が内臓に入り込んで起こる病気などの難病は、みなこの薬を用いれば、必ず効果があり、

まことに衛生の至宝であります。」<sup>22)</sup>

○宝丹：「起死回生、もっぱら暑気あたりやコレラ、吐き下しや腹痛、一切の伝染病、水や土が合わないこと、汚れに接して感染した病気などの症状を治すもので、これを服用すれば起死回生であり、その効果は絶大であります。」<sup>23)</sup>〔図3参照〕

### 3. 偽物に反対することを名目として、広告の実を上げる

これは新しい広告の手法ではなく、明治9年の『横浜毎日新聞』と明治13年の『東京日日新聞』における「精錡水」の広告の中で、岸田の製品を真似て作る者がいるので、「精錡水」の特徴を覚えて欲しいと岸田は読者に呼びかけており、さらには本物の「精錡水」の効能を知らしめるために、読者に試用して欲しいと強調した<sup>24)</sup>。これが典型的な、「偽物に反対することを名目として、広告の実を上げる」というやり方であった。

楽善堂は薬を売る以外に、上海において文具を製造販売した。そして「鍊金印泥〔印肉〕」という製品を紹介する際に、上述のやり方を用いたのである。その広告ではまず次のように言っている。「本堂製造の印肉は、本物の採砂、菱纖維、百煉、金箔、九成墨油等の材料を選んで特に意を用いて練り上げましたので、色彩鮮やかで、長く変色せず、冬は固まらず、夏は油浮きせず、中はガラスの美しい器に詰め、外側は金の漆で描いた小箱で覆い、精巧なことこの上なく、作り方が上品で、文具をめでのに充分足るもので、すでに長くその名を遠近に馳せております。」続いて、話題を一転させて、「最近偽物を作る者がおりますが、日本で安く真似ていて、中身は質が悪いにもかかわらず、外だけ飾り、魚目混珠〔偽物を本物として偽る〕を免れず、本堂の名声を汚すばかりか、お客様が間違っって偽物を購入されませんように、あえて申し上げた次第です。」と言い、さらに次のように強調している。「本堂の作る印肉はどの箱にも金で楽善堂監製という文字が書かれており、蓋の裏側には金の文字と小さな絵が付されております。ご愛顧いただいている方々にはみな、商標をしっかりと覚えていただき、見誤らないよ

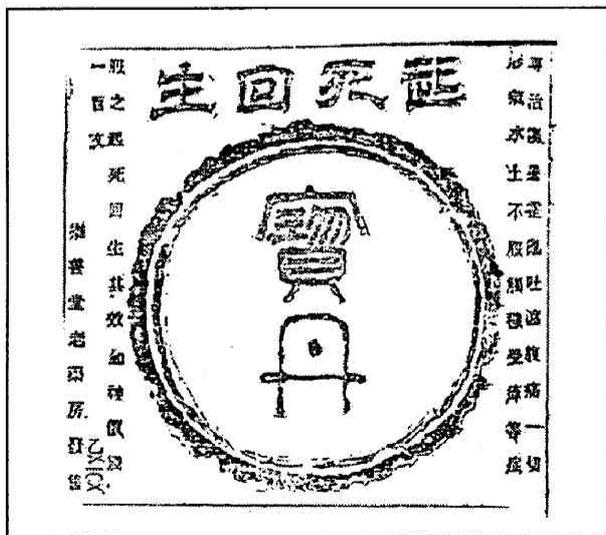


図3：『申報』1892年8月13日

うにしていきたい。大箱は洋銀3元、小箱は2元。<sup>25)</sup>このような広告を読むと、それを出した者の意図がどこにあるかを知るの難しくはない。

#### 4. カレンダーを贈呈して、楽善堂を宣伝する

カレンダーは本来年画〔正月に貼る絵〕の一種であったが、上海開港後、商人が商品を売り広めるために、西洋の古典的な人物画や風景画を広告に使って、得意先に送るようになったもので、後に中国の伝統的な年画の表現方法も取り入れて、広告のための粗品として、大衆に歓迎されるようになった。岸田吟香は上海で楽善堂を創業して以来、毎年『申報』を通じて、読者に美しいカレンダーを贈ることにより、楽善堂の社会的な影響は拡大し、人々によく知られる上海の名所になった。楽善堂のカレンダーは1880年から始まり、上海では中国の同類の宣伝品よりも早く登場した<sup>26)</sup>。「本堂は毎年正月に銅板の色鮮やかなカレンダーを進呈することが恒例となつて、既に10余年経ち、常に皆様の称賛を受けております。今回また労力と費用を惜しまず改訂し、癸巳19年〔西暦では1893年〕の合暦を印刷して上海に運びましたので、12月11日よりご愛顧いただいている方にお1人1枚お送り致します。<sup>27)</sup>

『申報』は楽善堂のカレンダーを受け取ると、いつも「鳴謝雅贈〔贈呈に感謝する〕」と記した啓示を紙上に掲げたが、文章では感謝の意を述べているとはいふものの、実際は機会を借りて岸田と楽善堂のために大々的な宣伝をしたのだった。

「日本の岸吟香先生は日本の仙客のすばらしい処方をもって上海に至り、長年経つが、その人となりは、もの柔らかで、陰君子の風情がある。かつて中国の珍しい書籍数十種を探し、銅板に彫って縮刷したが、インテリはこれを珍重した。暇を見つけて医術を究め、庶民の救済を重んじて、作り上げた丸薬や膏薬は、試すとたちまち効果を示した。古人の詩に曰く、半積陰功半読書〔陰徳を積みつつ勉強をする〕というのは、まさに先生のことである。昨日自制の中・洋の合暦をいただいたが、紙の繊細なこと牛の毛のごとくで、サイの角よりも明るく、色鮮やかなことは、まことにす

ばらしい。本館はこれを手にとって賞玩するあまり、数言を記して、感謝の言葉を申し上げた。<sup>28)</sup>

「日本の岸吟香様は雅を理解し古を好み、よく文字を正し、また医術に長じていて、医学が仁術に優れており、久しく芳名を馳せている。昨日私に本年の中・洋の合暦を送っていただいたが、彫刻が細かく、色鮮やかで美しく、座右に懸けて、実に目や心を楽しませるに足るもので、ただ吉凶を占うに万全とするのみならず、随時眺めるにあたいするものである。謹んで数語を述べて、感謝の意を表す。<sup>29)</sup>

「岸吟香先生は本港河南路に楽善堂を創設し、毎年正月には必ず、中・洋の合暦を作って、同人に贈っているが、上部に日本の美しい人物や景色が描かれており、その絶妙なるは、すでに多くの新聞が記しているところである。本年岸老は日本に帰り、我が友藤田重遠に一切を任せた。昨日数十幅をいただいたが、日本の内閣の諸大臣の像が印刷してあった<sup>30)</sup>

楽善堂は『申報』の読者にカレンダーを贈っただけでなく、さらに年始の際に印刷の美しい薬品紹介の目録を送ったこともあった。1892年2月の『申報』の啓示で次のように言っている。「日本の岸吟香先生は薬に詳しく、何にでも長けていて、薬を作れば、すばらしい効き目がある。10余年前上海に楽善堂薬房の支店を設けたが、今や先生は帰国してしまった。藤田氏が代わりに経営して、心を込めて薬を作っているのです、その効能はすばらしい。今回銅板で薬品紹介の目録を印刷したが、名人が描いた雲竜と、新年を祝うめでたい言葉で飾っている。本館は委嘱されて本日読者に鑑賞していただけるようお届けすることになった。<sup>31)</sup>カレンダーの形を使って、美しい薬品紹介の目録を作り、その中の年月を薬品名に変えたことだけでも、まさに楽善堂の商売上の新しい創意であったといえる。

楽善堂がカレンダーを贈呈するというやり方はまことに奇抜なものだった。1889年12月末、日本の劇団「日本服部松旭齋」の著名な俳優である天一が上海で公演を行った。天一は東京の人で、かつてヨーロッパを遊歴し、西洋の雑技を学んだ。彼はまず「西樂園」で公演し、後に四馬路の「桃



- 28 万靈黒虎膏「下疳，横根，ただれ等を治す」1元，1890～92年。
- 29 槐芯神違散「下疳の破れ，膿や血の流出等を治す」4角，1890～92年。
- 30 洗葉千里光「下疳，横根，腫れ等の症状を治す」2角，1890～92年。
- 31 梅花消毒膏「下疳，会陰部の癰，梅毒等を治す」2角，1890～92年。
- 32 神威霹靂針「初期の下疳を治し，使うとすぐ消え去る」3角，1890年。
- 33 補元追毒丸「全身を侵した梅毒，病毒等を治す」1元2角，1890～92年。
- 34 化毒金鼎液「梅毒，横根等を治す」1元，1890～92年。
- 35 八宝消毒飲「梅毒，病毒，顔面のできもの等を治す」1元，1890～92年。
- 36 神効駆毒水「頭，顔のできもの及び破れて膿が流れ出る等の症状を治す」4角，1890～92年。
- 37 花柳消毒丸「梅毒，できもの，横根等治す」2角，1890～92年。
- 38 結毒紫金丹「梅毒等種々の醜い症状を治す」1元2角，1890～92年。
- 39 解毒紫金丹「できものの毒，ひどいただれ等を治す」4角，1890～92年。
- 40 銀青化毒膏「できものの毒の体内侵食，関節痛等を治す」6角，1890～92年。
- 41 奪天再早丸，1892年。
- 42 婦宝勝金丹「婦人の貧血，虚弱体質を治す」4角，1892～1893。
- 43 補天大造丸，1892年。
- 44 調経種玉丸「生理不順，不妊症を治す」3角，1892～93。
- 45 頭痛立止膏，1892年。
- 46 培元震靈丹，1892年。
- 47 産後養榮丸「婦人の産後の貧血，虚弱を治す」2角半，1892～93年。
- 48 孔聖枕中丹「神經過敏，ノイローゼ等を治す」2角，1892年。
- 49 神効通経丸「婦人の虚弱体質，月経の不通等を治す」1角，1892～93年。
- 50 刀傷合口膏，1892年。
- 51 洗葉千里光，1892年。
- 52 天王補心丸，1892年。
- 53 消疳活幼丸，1892年。
- 54 人參大補丸「救世の金丹 衛生の玉粒」2角，1892～1893年。
- 55 小兒涼膈散，1892年。
- 56 補中益氣丸，1892年。
- 57 五淋二妙薬，1892年。
- 58 靈応万金膏，1892年。
- 59 千金保真丹，「ひどい古傷，精力不振等を治す」1元5角，1892年。
- 60 白濁胶囊丸「天下無双，淋病を治す妙薬」5角，1892～93年。
- 61 八宝消毒飲，1892年。
- 62 滋腎回春丸「腎経の衰弱，男子の勃起不能等を治す」1元，1892年。
- 63 痔瘡除根丸，1892年。
- 64 暈船安神丸，1892年。
- 65 托里消毒飲，1892年。
- 66 不老長春丸「氣血を調和し，腎水を滋養する」3角，1892年。
- 67 痔瘡即愈膏，1892年。
- 68 精制薄荷霜「暑気あたり，胃腸疾患，吐瀉等を治す」1892年。
- 69 海竜聚精丸，1892年。
- 70 神効導滯丸，1892年。
- 71 頭風髮腦杵「頭痛に効き目あり，痛みすぐに止まる」2角，1892年。
- 72 神効駆毒水，1892年。
- 73 徐真人玉壺秘薬「疲れすぎ，色欲による体力消耗等を治す」3元，1892年。
- 74 駐顔天真丸「徐真人玉壺秘薬と同じ効果」2角，1892年。
- 75 吸毒蛇頂医師，1892年。
- 76 結毒紫金丹，1892年。
- 76 七宝美須丹「皮膚を潤し，黒ひげや黒髪的美しさを保つ」3角，1892年。
- 77 固齒擦牙粉，1892年。
- 78 平補養心丸「この丸薬は水・火共に補い，心・肝臓に良し」3角，1892年。
- 80 祛湿薬肥皂，1892年。
- 81 銀青化毒膏，1892年。
- 82 哮喘即治紙煙「急性・慢性ぜんそく，息切れ，咳等を治す」1角，1892年。
- 83 麦液潤肺胶「日本に伝わる聖薬，痰や咳を治す」大缶5角，小缶3角，1892年。
- 84 八仙長寿丸「心臓・腎臓の不和，虚火上炎等を治す」4角，1892年。
- 85 小兒止咳糖漿「子供の咳，痰，声のかすれ等を治す」2角，1892年。
- 86 秘方紫雪丹「暑気あたり，胃腸疾患，腹痛，急性吐瀉等を治す」1892年。
- 87 東方公一粒金丹「この薬，疫病，暑気あたり等百病に通ず」1角，1892年。
- 88 參麦養和飴「顔を潤し腎臓に益す。脾臓，心臓を養う。長く服すればさらに良し」4角，1892年。
- 89 仏手催生丸「効果この上なし」100文，1892年。
- 90 婦科百妙湯「婦人科になくはならぬ至宝なり」100文，1892年。
- 91 滋燥潤腸丸「胃腸の伏火，胃もたれ等を治す」62文，1892年。
- 92 秘伝安胎丸「妊婦の虚弱体質，胎気の不安定を治す」3角半，1893年。
- 93 万全保胎丸「婦人の虚弱，流産しやすい体質を治す」3角，1893年。
- 94 宝丹「暑気あたり，胃腸疾患，吐瀉，腹痛等を治す」100文，1892年。
- 95 活幼丸，5角，1893年。
- 96 肥兒散，3角，1893年。

- 97 止咳糖漿, 2角, 1893年。  
 98 急救時疫靈丹「病毒駆逐の, 救世の良薬」200文, 1893年。  
 99 白帯葉棉球「長く東洋諸国で流行し, 効果抜群, 百度試して変わらず」1箱100文, 1球16文, 1893年。  
 100 紅白痢疾丸「赤痢等を治す」四角, 1893年。

## 付録2 樂善堂が上海『申報』に載せた書籍販売の広告

[掲載年度別に書名, 価格の順に列記し, 記載のない部分は省く。]

- 1 1885年8月掲載  
 五経体注(4元), 五経備旨(4元), 五経掲要(2元), 四書合講(1元6角), 四書備旨(1元8角), 四書典林(1元6角) 四書味根録(2元), 網鑑易知録(4元5角), 康熙字典(2元8角), 又三層体(2元4角), 佩文韻府(60元), 翁注困学紀聞(2元), 困学紀聞目録(6角), 日知録集釈(2元8角), 角山樓類腋(2元), 広治平略(1元6角), 中外輿地図(1元), 吟香閣叢画(2元), 詩韻合璧(2元), 詩韻扇面(1角6分), 詩句題解匯編(2元5角), 策学総纂大成(1元6角), 試律大観正統(2元6角), 周易本義通釈, 毛詩鄭箋注, 四書蒙引, 儀礼経伝通解, 仿宋本左伝, 左伝揖釈, 郭注庄子, 管子訓詁, 韓非子解詁, 乾道本韓非子, 絵図山海経, 絵象列仙伝, 世説新語補, 東萊博義, 福惠全書, 智囊, 智囊補, 秘伝花銭, 野客叢書, 宋元通鑑, 明朝紀事本末, 通鑑紀事本末, 安南志略, 大越史記, 東国通鑑, 明季遺聞, 廿二史劄記, 七書直解, 武備志, 富国志, 公法会通, 万国公法, 文体明弁, 白氏長慶集, 杜工部集, 杜律大観, 俞蔭甫東瀛詩選, 錢牧齋全集, 詩法纂要, 尺牘双魚, 本草綱目, 素問靈樞次注, 素難針灸要旨, 東医宝鑑, 赤水玄珠, 唐僧慧琳一切経音義, 漢篆千字文, 翻刻隸統, 新選六書通, 六書正偽, 偏類六書通, 双鈎北魏熒陽鄭氏碑, 鈎刻大字麻姑仙壇碑, 鈎刻堵河南孟法師碑, 介子園画伝, 原版晚笑堂画伝, 耕香館画卷, 初齋画卷, 玄対画譜, 吟香閣叢書, 名数画譜, 竹筒四君子画冊, 靈齋画譜, 竹筒画稿, 華山画竹譜, 書画同珍, 凌煙閣功臣画伝, 唐詩画譜, 日本名山図会, 梅嶺百鳥図, 唐土名勝図会, 紅樓夢図咏, 海仙二十四孝図, 小山林堂文房図, 銅版耕積図, 毛詩品物図考, 五経図匯, 江村銷夏録, 張子祥著色花卉琴条, 錢吉生著色美人琴条, 安南地区, 李氏歴代沿革図, 朝鮮地区, 上海城廂租界全図
- 2 1885~92年掲載  
 地球五大洲総図(附各国旗号併宇内至高山大河方里人口表)(1元半), 亞西亜東部図(1元半), 中外輿地図(1元), 大清一統図(3角), 日本輿地全図(2元)
- 3 1892年10月掲載  
 地球万国全図(8角), 北京図(3角) 上海城廂図(5角), 金輶籌筆和約新書(5角), 新出茗壺図録(8角)

4 1892年11月掲載

## 注

- 1 上海樂善堂の営業内容については, ふつう薬と書籍の販売を指し, 問診医療について言及しているものは少ないが, 実際には問診医療も行われており, そのことを『申報』の2つの史料が証明している。

黄協垣(黄式権)は「春江送別図記」の中で次のように述べている。岸田吟香は「かつて上海で薬局を作ったが, 医者を求める者が沢山押しかけて薬局には入りきれないほどであった。先生は一人一人の脈をとって, 最善を尽くすので, ひとたび治療をすれば, たちまち枯れ木に花が咲くがごとくに元気になった。」(『申報』1889年3月10日)。

1891年12月18日の『申報』に載った「樂善堂牙科」の広告の中で次のように述べている。「本堂は「牙痛立止」などの薬で名を馳せていて中外遠近の諸君の賞賛を得ておりますが, 退いて思いますに, 病気の原因は, 人によって異なるもので, まして歯痛は痛む部分が小さいとはいうものの, 長く患うと胃や肺が次第に弱って, 飲食できなくなり, 脳髓がだんだん侵され, 精神が落ち込むこととなります。およそ全ての病はこれによって生じるのですから, どうして軽んじることができませんか。ここに特に日本東京歯科の名医高梅建先生に上海までお越しただいて, 本薬房で調剤していただきますが, 効き目がない場合は, さらに先生に治療していただくことができます。先生はかつて我岸吟香先生の門を叩き, 内外の医科を学び, 精通してからまた歯科を専攻したので, 技術は非常にすばらしく, 人が競って治療を求めるのです。」「本国の人が深く信頼をおいているばかりか, 中国・西洋の役人で日本にいる人も, また競って治療を求めてやって来るので, 門外には沢山の人が並んでおります。」「近年年末の暇な時期になって, およそ老若男女の歯を患っている方は, すぐに治療にいらして下さい。養生してよく食べて, 新年を迎えれば, どうして楽しくないことがありましようか。治療費はきわめて安いのですが, なお相談することができます。」

- 2 太田原在文:『十大先覚記者伝』, 大阪毎日新聞社, 東京日日新聞社, 1926年出版, 第11頁。  
 3 『日本新聞広告史・電通創立四十周年紀年』, 1940年11月出版, 第148~149頁。  
 4 内川芳美『日本広告発達史』(上), 電通出版, 1976年8月, 第43~44頁。  
 5 岸田吟香「支那売薬の売拡め」, 『広告大福帳』。内川芳美『日本広告発達史』(上), 電通出版, 1976年8月, 第50頁。  
 6 『日本新聞広告史・電通創立四十周年紀年』, 第322~323頁。  
 7 杉浦正『岸田吟香—資料から見たその一生』, 汲古

- 書院，1996年出版，第272頁。
- 8 『申報』1872年10月15日。
  - 9 『上海近代大事記』，上海辭書出版社，1989年3月10日。
  - 10 『上海新報』の記事によると、「日本の三大書家の一人なる日下部鳴鶴翁は本便の横浜丸にて来滬せられ英租界河南路吟香翁の書薬店楼上の玉蘭吟社に仮寓を定められ当分は当地に滞留せらるるよし」とある（『上海新報』第43号，明治24年（1891年）3月27日）。
  - 11 黄協埏『春江送別図記』，『申報』1889年3月10日。
  - 12 同上。
  - 13 若山甲蔵編『岸田吟香翁』，（日本）宮崎県政評論社，1925年出版，第66頁。
  - 14 『申報』1886年3月11日。
  - 15 『申報』1882年3月6日。
  - 16 『申報』1892年10月6日。
  - 17 黄式権「松南夢影録」。『滬游雜記・松南夢影録・滬游夢影』，上海古籍出版社，1989年出版，第100頁。
  - 18 1862年初夏，日本の幕府の役人と長崎商人50人余りが「千歳丸」に乗って上海を訪れたが，この時上海ではコレラが流行しており，「千歳丸」に乗っていた人の半数以上が感染して，3人が死亡した。「従者」ということで参加していた長州藩の高杉晋作は，同行の者，病容ははなはだ多し。諸子畏縮し，あるいは促して帰らんとする者あり。」と日記に記している。
  - 19 何桂笙「岸吟香先生『痧症・花柳弁症要論』序」。『申報』1888年7月27日。
  - 20 「上海樂善堂老薬房發售痧症・敬送『痧症要論』」。『申報』1893年8月16日。
  - 21 『申報』1893年4月22日。
  - 22 『申報』1892年9月9日。
  - 23 『申報』1892年8月13日。
  - 24 天野宏『薬文化往来』，青蛙社，平成4年出版，第123頁。
  - 25 『申報』1892年11月5日。
  - 26 中国の著名な年画研究家である王樹標の考証によると，カレンダーという言葉が最も早く登場したのは光緒22年（1896年）であり，当時の上海の四馬路では鴻福来呂宋大票行が宝くじ付きの「滬景開彩図・中西カレンダー」の絵を顧客に送っているとのことで，この絵が登場してから，カレンダーという言葉が用いられるようになった，と言われている。（上海画報出版社『老月牌』，1997年出版，第4頁。）実際は，早くも1880年，岸田吟香の樂善堂はすでに上海でカレンダーを発行していたのである。
  - 27 『申報』1893年1月29日。
  - 28 『申報』1885年4月8日。
  - 29 『申報』1886年2月23日。
  - 30 『申報』1890年2月10日。
  - 31 『申報』1892年2月22日。

32 『申報』1899年2月3日。

\* 著者の陳恩祖氏は，2002年6月から半年間，本学の外国人研究員として滞在された。本論文は，同年12月14日に早稲田大学で開かれた20世紀メディア研究会で報告した内容に加筆，訂正を加えたものである。

\* 翻訳にあたっては丁伊勇先生のご教授を得た。

\* 訳者は本学外国語学研究科中国言語文化専攻博士後期課程に在籍。訳注は〔 〕内に示す。